

## 三島文学における欲望と精神分析

ダンカン・アダマス

主題が三島の人生についてであれ、三島の作品についてであれ、三島論者がとりわけ好んできたことの一つに、未熟な精神分析というものがある。夢想的で空想的な三島作品の随所に暴力と性のテーマが顕著であること、そして、（とくに三島の自刃における）空想と現実との重なり合いを考えれば、確かに、そうした精神分析的な論法は、内容的に豊かであるし、容易な選択肢となるにちがいない。これは、“伝記的な考察”へと横滑りするという、三島作品に関する論考の一般的傾向の一端であって、その場合、三島作品を解釈する根拠として、三島の政治的活動や個人史に関する仮説が利用される。たとえば、少なくとも、二つの論文（奥野健男の1954年の論文と前田貞昭の1979年の論文）は、あたかもテキストの外にいる個人に対するかのように、直接テキストに対して精神分析を適用し、フロイトのエディプス・コンプレックスの概念で『仮面の告白』（1949年）を解釈している。このような場合、テキストの外にいる個人というものは必ずそのテキストの作家と同一視され、その結果、作家の人生の細部や、それに対する分析が、テキストを読解するための補足的な証拠として受けとられることになる。そして、その逆もまた同様になされる。こうした作家とテキストの交換可能性は、まさに〈三島という作家〉を分析しようとする人たちによって追求されるものであり、彼らは、あたかも精神分析医の分析対象であるかのように〈三島のテキスト〉をその診察台に乗せてしまう。そうした趣旨の先行研究には、たとえば北垣隆一『三島由紀夫の精神分析』（1982年）や、より最近だと、Jerry S. Pivenの『三島由紀夫の狂気と倒錯（*The Madness and Perversion of Yukio Mishima*）』（2004年）がある。

Pivenによる分析は、上記のように『仮面の告白』を取り扱ってきた先行研究のなかでも典型的なものだ。そこでは、『仮面の告白』という小説を、直接分析対象にすべき自叙伝的資料ととらえ、主人公の少年期の体験のなかに、成人後の三島の性格に関する手がかりを見つけようとする。三島の女性嫌悪や病への恐怖の要因は、三島が女性と病とを同一視していたところから、病気の祖母と暮らしていた少年期の体験に帰せられる。こうした因果関係について、Pivenは次のように述べる。

「恐怖、嫌悪、憤りという感情を考慮に入れば、三島のセクシュアリティは、去勢、病弱、貧弱、女性的、汚い、といった性質をもつあらゆるものに対する反動形成（reaction formations）に基づいており、また、それゆえに三島は、その性欲を、見かけがよく魅力的であるような、勇ましく清潔で力強い男性たちに向けたのだ。」（26）



報告者の発表風景

三島作品自体がこのような分析に都合の良い手がかりを我々に提供してくれるので、この種の心理学的な探究は、たしかに魅力的なものに仕上がってはいる。だが、そうした研究は、そのような分析の手がかりが、どのように作品に取り入れられたか、という考察を見過している。というのも、三島自身が早い時期から精神分析に魅せられていたのだ。したがって『仮面の告白』の読者が、女性嫌悪、男根的なナルシシズム、性的倒錯の源泉を作品に容易に見いだせるということは、三島がそもそも精神分析に基づいて物語のいくつかを描いたという事実を読者に喚起させる事柄であって、決して、文学の精神分析医ともいべき論者の読解を読者に納得させるような事柄ではない。

そこでまず、『仮面の告白』とは違って、作家の人生を反映しているとは思えないさらに別の作品に目を向けてみることで、精神分析の力学を、三島の性心理の特性という厄介な問題から解き放つ近道としてみよう。『仮面の告白』の翌年、1950年に刊行された『愛の渴き』は、若い寡婦の義父の家を舞台としており、若い庭師に対する欲望を寡婦自身が受けとめられないことから起こる惨劇が描かれている。1953年刊

行の選集のあとがきで三島は、余談として、『愛の渴き』の女主人公の狂気の細部の多くがフロイトの『ヒステリー研究』（1895年）からとられたものであることを“告白（confession）”している。

「最後に、一寸滑稽な告白をすると、この女主人公の狂躁のディテールは、フロイトの「ヒステリー研究」に負うところが大きであった」（三島 2000, v.28: 103）

この短いあとがきで三島はフロイトよりもモーリヤックの影響について多く言及しているが、フロイトから三島がえた恩恵は、魅力的なわずかな細部以上に、さらなる広がりを見せるのだ。この作品全体の構造が、フロイトの『ヒステリー研究』で示されるヒステリーの典型に従っているのである。

フロイトがヨーゼフ・ブロイアーと共同執筆した1895年の論考には、彼らのどちらかが分析した女性たちについての多くの事例研究と、さらにヒステリーの重要な特徴を概説する理論的な論考が盛り込まれている。そして、そうした理論と、事例研究の細部との両方が『愛の渴き』の物語に反映している。ヒステリー性質の要点は、著者たちの言葉では、「ヒステリー症の人々は、主として回想に苦しむ。」（Freud v.1: 7）と要約されている。ヒトの体験の情緒的なこと、つまり体験が生み出す感情は、通常「意識／無意識の反応の全ての段階」（8）、すなわち言葉、涙、笑い、復讐などによって排出されるのだが、体験があまりにトラウマとなる場合には、それらは、直ちに抑制されてしまうか、あるいは本人の意識のなかに十分にはその体験が記録されていないような（例えば、なんらかの理由によって半覚醒状態や催眠状態にあるような）状態のときに生じる。そうした場合、感情が排出され（フロイトの用語では「解除され（abreacted）」）ていないために、時間が経っても潜在性は少しも損なわれることがなく、そうした感情はたえず呼び戻されることになるのだが、しかしそれは無意識のうちのみ呼び戻される。トラウマに結びついた心理的な苦痛は、それが肉体的な苦痛へと変換される「転換（conversion）」の経験か、あるいはそのトラウマの苦痛と象徴的に結びついた不随意運動、たとえば、神経性チック、同じフレーズのくり返し、強迫観念に駆られた振る舞い、根拠のない恐怖といったものとしてあらわれる。これらの慢性的な症候に加えて、ヒステリー患者があとで思い出せないようなヒステリー発作（感情の爆発や肉体の痙攣）もあるだろう。これらの

発作は抑圧された意識の表面化であるが、そうした意識は通常の意識とともに存在しており、そこにはトラウマ体験の記憶とそれに結びついた感情が存在している。

『愛の渴き』の悦子は、物語の冒頭から典型的なヒステリー症候を多く示す。これは、直接的で明白な原因がまったくない「不可解な（inexplicable）」感情である。最初の場面には、こうある。

「大阪の町というものを、東京に生れて育って知らない悦子は、いわれのない恐怖心をこの都会に（中略）抱いていた」（9-10）

そのあと、彼女の頻繁な頬の紅潮については、

「頬は著しく熱い。よくこういうことがある。何の理由もなく、もちろん何の病因もあるわけではなく、出しぬけに、火をつけられたように頬が燃えるのである」（10）

とある。また、彼女はよく妄想にとらわれるが、それはフロイトによって明らかにされたヒステリー発作の特徴である。

これらのささいな症候をヒステリーに結びつけて考えることができるのは、悦子自身が説明できずに、彼女の無意識のなかに排出されずに潜在している一連のトラウマ体験の存在があるからである。悦子の夫は、平気で不貞をはたらいたうえ、悦子の嫉妬心を駆り立てるために、不倫の証拠（悦子を買ったものではない贈り物や、他の女性たちの写真）をあからさまに自宅に残していた。夫は悦子の性的な求めも拒んだ。悦子は自殺しようと決心するが、そのとき夫は腸チフスで入院し、2週間後に亡くなってしまった。悦子が病院で看病している間、夫の三人の愛人たちが訪れてくる。悦子はそうした侮辱に耐えながら、夫の末期の看護をしなければならなかっただけでなく、血液混じりの排泄物にまみれながら、恐ろしいほどのトラウマ体験のなかで夫の死を見届けなければならなかったのだ。

フロイトとブロイアーによれば、病人の看護はヒステリーの起源としてよく見られる一要素である。それは、彼らが示した5症例のうちの3症例にみられる。たとえば、Anna O.は父親の病床で恐ろしい幻覚症状に陥ったと報告されている。それは彼女のヒステリー症候の根本原因であった。Emmy von N.夫人のヒステリー症候もまた、病気の娘を看護しているときにはじまり、夫の死を目撃したことで悪化した。Elisabeth von R.嬢の場合は、父親、母親、姉妹の看護で疲れきって

いた。フロイトは、Elisabeth von R嬢のケースに言及して次のように記している。

「病人を看護することが、ヒステリーの症候の前段階において非常に注目すべき役割を担うという事実には、十分な理由がある」（161）

中断される睡眠や絶え間ない心配が一因となっているのだ。しかし、さらに重要なことに、過剰な看護の負担は、その看護人が、「一方では、あらゆる感情の兆候の抑圧を習慣化するだろうし、また他方、自分の印象を公正にあつかう時間も強靱さも持たないために、すぐにそうした印象から注意をそらしてしまう」ことを意味する。したがって、この時期の体験によって起きる感情は抑圧されるのだが、しかし患者が亡くなれば、これらの印象やそれに付随した感情は発動しはじめ、「極度の疲労という短い休息期間のあと、看護の期間中にまかれたヒステリーの種が突然顔を出すのだ」（162）。三島は、病人の看護を比喩的な用法で描くが、しかし三島はフロイトの解釈にひねりを加える。悦子は、夫の死を見届けたことではトラウマを経験しないし、また、あまりに看護に忙殺されるために夫の不貞が引き起こす感情は表現されない。だが彼女の抑圧されたトラウマは、感情の高揚に取ってかえられているのだ。

「私の看護には、目的のない情熱があったが、誰がそれを知ろう。良人の臨終に流した私の涙が、私自身の日々を灼きつくしたこの情熱との離別の涙だと誰が知ろう」（三島 2000, v.2: 47）

悦子が経験する感情はすべて、熱狂的な看護へと葬られている。

「彼女の存在は、もはや一つの眼差し、一つの凝視であった。（中略）失禁の悪臭を放つこの半裸の病人の傍らで、悦子は日に一、二時間うつらうつら寝むだけである」（58）

このようにして、彼女のヒステリーの種子がまかれるのだ。夫の不貞によって起こる感情は表現されることはない。なぜなら、自殺の企てによって復讐を遂げるつもりだったちょうどそのとき、病院で夫の看護をしなければならなくなったからである。こうした表現されぬ感情に、夫の死を見るというトラウマが加わる。von R嬢のヒステリーに関するフロイトの説明におい

てさらに複雑なのは、父親の看護によって、若い男性への性的な感情が抑圧されてしまうということだ。その、もう一つの症例は Lucy R.のもので、彼女のヒステリーは、雇い主に寄せる自分の恋情を認められないことから引き起こされた。三島による悦子の説明のなかでも、若者への愛がトラウマをさらに複雑化させている。悦子は、自分が愛人となっている初老の義父によって雇われた若い庭師・三郎に恋をしている。三郎との肉体関係の不可能性と、望まぬとも決して避けられぬ義父の弥吉との肉体関係は、悦子にとって解決できない不安を生みだす。それは、彼女が表現できず、またそれゆえに彼女の既存のヒステリーを増幅されるようなトラウマである。この第二のトラウマは、女中の美代が三郎の子を身ごもったことが明らかとなり、二人の結婚が決定的となったとき、絶頂に達する。このとき、ヒステリーの典型的な特徴が見られる。もともとのトラウマと結びついたヒステリー症候の再発である。

「悦子はまざまざと良人が幾夜となくつづく外泊で彼女を苦しめたあの晩夏から秋にかけての眠れぬ夜という夜を思い起こした。（中略）あのとときと同様の兆候は、説明しがたい寒さの戦慄と、手の甲までが鳥肌になる一種の発作とにあらわれていた」（152-3）

悦子のヒステリーがもっとも顕著にあらわれているのは、ヒステリー発作だとみとめられる次の3つの出来事である。祭りの群衆のなかで三郎の背中を押しやっている自分に気づき、彼の背中を強くひっかくこと。手を火の中に入れて、わざとやけどすること。そして作品のクライマックスで、悦子がつるはしで三郎を殺すことである。これらがヒステリー発作であることは描写から明らかだ。たとえば、最初の二つの出来事では両方とも、悦子は直後にそれらの出来事を忘れてしまっているようである。また、祭りと殺人の両方で、悦子は突然「おどろくべき強靱な力」（210）にとり憑かれたと描出されている。結末では、三郎を殺すことによって悦子はヒステリーから解放されるのだが、それはフロイトが、強い感情の解放すなわち復讐による精神浄化作用の達成だと論じている手段のうちの一つである。作品の結末部では、弥吉が悦子の眠りの安らかさに驚嘆している。

こうしてみると、フロイトが論じたヒステリーの起源と症候の〈型〉に、悦子の行動を一致させようと三島が相当な労力を費やしたことは明白となるだろう。

こういった要素を『愛の渇き』に明らかにしてきたのは、悦子に精神分析をほどこすためでは決してなく、単に、三島が自作にかした〈型〉を把握するためである。こう把握するとき、我々が、以上のような、精神分析学への三島の関心や、フロイトの事例研究モデルを創作上意図的に使用する三島の意気込みを、他の三島作品に見いだしたとしても、それは驚くにあたらないだろう。そうした発見は、我々があたかも三島が個人の事例史を無邪気に提供してくれているかのように思いこみ、また、作中の精神分析の要素が精神分析のやり方で三島作品にせまることの正当性を示すものである、という考えを思いとどまらせる。ここまできて我々にわかるのは次のようなことだ。『仮面の告白』にもとづいて、〈三島は祖母と過ごした少年期体験によって男根的ナルシストとなり、また、女性嫌悪の男性同性愛者となった〉とすることは、じつは、『愛の渇き』にもとづいて、〈悦子は、夫の死というトラウマ体験によってヒステリー患者になった〉とすることと同じなのである。これらの見解は、それら二作品の構造とその因果関係について語っているが、作家自身に関して伝えている情報は、三島が精神分析学に対する強い関心と深い理解をもっていた、ということのみなのである。

こうしたフロイトに対する三島の関心を考慮に入れつつ、三島のもう一つの初期作品『禁色』（1951年、1952年）をみてみたい。この作品でもまた、精神分析の概念が用いられているが、『愛の渇き』よりもやや複雑な方法によっている。『禁色』は『仮面の告白』と共通して、男性同性愛欲望に焦点があてられているため、このテーマに関する語りの扱いは、批評家たちによって三島自身の人生の出来事とたびたび結びつけられてきた。

1951年12月からの6ヶ月間の海外旅行、とくにギリシャ滞在が決定的な転機となって、その後の三島作品は初期作品にあった厭世的なテーマから、『潮騒』（1954年）のような、より明るい雰囲気へと展開し、初期作品にあった男性同性愛という暗部に立ち戻ることはなかった、というのが三島の作家的成長に関するごく一般的な定説である。この西欧旅行は、『禁色』の第一部掲載と第二部掲載の間になされ、ドナルド・キーンは、第二部における悠一の男性同性愛の描写について、「新しいスタートをきる前に、自分のなかにあるすべての「暗さ」を一掃する」（キーン：1194）ための試みだととらえている。

松本徹は、俊輔に女性を愛せないと告白する第一部の悠一から、実際には女性との関係がもてる第二部の

悠一へといたる、同性愛から異性愛への発展について論じ、『禁色』にも、さきのような三島の作家的成長と同じ図式を当てはめる。この図式によれば、松本は作品の鍵となる挿話として、鏑木夫人が悠一と肉体関係があると装って悠一を脅迫から救った後、二人が賢島に向かう旅中、悠一が鏑木夫人の肉体美に気づいた場面を挙げている。（松本 2005年：147）だが、同性愛から異性愛への成長というこの読みは、同性愛願望を性発達の過程で通るべき段階であるという特定の概念に依存した、単なる循環論法にすぎない。フロイトの精神分析に由来した（だが、厳密には標準形としては見られないような）この概念は、成人の同性愛を性発達の失敗と規定する。前述の読みが循環論になっているのは、作品の要素が依拠しているのと同じセクシュアリティ・モデルに、読みが依存しているからであり、それは、そのセクシュアリティ・モデルがそのモデル自体を裏書きするという意味しかもたない。そして、さきの『愛の渇き』で論じたことを思い返せば、三島によって描かれた悠一のセクシュアリティに、フロイトに由来する要素を見いだすことは驚くにあたらない。

いずれにせよ、こうした精神分析のモデルは、『禁色』発表当時の日本でもっとも広く流通していたセクシュアリティ・モデルだった。だが作品に、その作品の背景の反映を指摘するだけでは、読みとして意味をもたない。かわりに、同時代的な性言説やフロイトへの依存を作品に捉えてゆくことから出発すれば、そうした言説の連動の様相をより明確に読みとることができる。というのは、三島が『愛の渇き』よりも、さらに『禁色』において、フロイトに依存することと同じくらいに、またフロイトに挑戦もしているからである。

こうしたコンテキストのもとで、戦後日本の精神分析モデルに見いだせる重要性は、たとえば、大衆雑誌の同性愛欲望に関する解説が、論旨において明らかにフロイトを参照し、妨げられた発達という把握と治療の可能性とに焦点を当てているということである。

「文化人の性科学誌」と銘打つ雑誌『人間探究』1950年8月版には、不安を抱えた若い同性愛男性たちからの二通の手紙が助言欄に掲載されているが、それらは両方とも治療の可能性を質問した手紙である。それらへの回答は、性問題に関する戦後の著名な評論家・高橋鐵によって書かれている。かつては先天的で治らないものだと考えられた同性愛だが、フロイトによって、それが同性愛者だけに限定される事象ではなく、大半の人が幼年期に経験する一過程であることが示された、と高橋は論じる。とはいえ、その幼年期の強烈な体験

が成年期にまで残ってしまう人もいる、とも読者に伝える。高橋は、これを同性愛の一形態とみなし、その一方で、自己愛の深い者は自分とよく似た者に惹かれるかもしれないので、そういう場合には自己愛の一形態とみなせる、と述べる。高橋は手紙の差出人たちに、彼ら自身がそうした二つの異なった種類の同性愛者であることを伝える（人間探究 3、46-51）。こうした先天的な同性愛の概念否定と同性愛タイプの識別は、確かに、フロイトの『性理論に関する三論文（*Three Essays on Sexuality*）』（Freud v.7、136-48）の最初にある、転換に関する論述にみられる。同雑誌の 1951 年 1 月版では、再び高橋が 20 代の 3 人の同性愛男性にインタビューしている（「天国か地獄か：男子同性愛者の集い」人間探究 8）。そこで高橋は、インタビュー相手の青年たちに向かって、彼らの性欲望はたいいていの場合、思春期における同性愛段階からの発達すなわち異性愛へと「卒業する」ことに失敗した結果だと説明する。ある者は母親が若くして死んだことと、継母が自分に辛くあたったことを回答して、因果関係に関するフロイトの考え方に同意はしているが、青年たちはあまり納得していないようだ。さらに高橋は、もし彼らのような状況にある者が、月に 2、3 回自分のところを訪ねてくれば、たいいていは治ると述べる。さて、こうした高橋の例、および、当時の一般雑誌にみられる多くのよく似た論説からは、性の発達段階としての同性愛からの「成長（progress）」という考え方が、『禁色』連載の頃の日本において一般的であったことが明らかになる。

『禁色』では、同性愛者であることをうまく家族に隠しており、手の込んだ計略で巧妙に結婚を逃れた実業家の河田について、「おそらく河田の顔面神経痛は、こうしたたえざる内心の裏切から生じたのである」（三島 2000, v. 3: 342）と、顔面神経痛に悩まされる様子が描かれるが、それはフロイトの見解を綿密な方法で物語化している。同性愛に関するフロイトの見解の暗示は、悠一についての記述にくり返しみられる。たとえば、悠一は父親が亡くなって以来、母親と二人暮らしであって、物語の進展とともに悠一の母親は威圧的で管理主義的な母親像と次第に重なってゆき、一方で、主として悠一を支配的に操る人物・俊輔が、第二の管理主義的な母親であるかのように悠一の母親と一体化してゆくところに、さきのような暗示があらわれている。具体的には、悠一と恭子との関係を次の段階に進ませるためのメモを、俊輔が悠一に書いてやっていると、悠一はこの老い衰えた手から、母親の蒼ざめてややむくんだ手を聯想した。不本意な結婚や悪

徳や虚偽や詐術に対する情熱をこの青年の中に目ざめさせ、そのほうへと彼を駆り立てたのは他ならぬこの二つの手である」（169）という具合に。

しかし、また三島は、精神分析的な解釈が施されるのを拒否するために骨を折ってもいる。俊輔の指示に従って、悠一が年上の鏑木夫人を誘惑する場面において、三島は、三島らしいやりかたで、読者の解釈の先回りをして、彼ら二人の情事に明確な〈型〉を当てはめてしまうのだ。

「鏑木夫人が世間一般の例でいうと母親の年齢にさしかかっていたことのあらわれか、彼女が悠一の中に直感したのは、母親と息子の間の愛をはばむようなある禁忌だった」（98）

このような先回りの説明は、悠一の性欲望が、フロイトが同性愛の原因の一つと規定するエディプス・コンプレックスを克服しそこねた結果であると読者に解釈させないようにする。すなわち三島は、フロイトの解釈を拒否と同時に、意識してもいる。読者に解釈をさせないように、三島はそれを書き込んでしまうのだ。そのようなはっきりとした解釈の拒否は次の部分にもみられる。まるで三島自身であるかのように、俊輔は読者から心理学的な分析を施されることに先回りするのだ。

「推敲を重ねた文章にこもる以上の本音が、日常匆卒のあいだの不用意な言動にあらわれるという近代心理学の探偵趣味を俊輔は蔑んだ」（144）

精神分析モデルやその対象である深層心理の否定は、『禁色』ばかりではなく、基本的に三島作品全体に見られることだ。そして、その場合、外面的／表面的な見かけは、内面的な心情や性格と同義とみなされている。例えば、我々は次の部分をどう読むだろうか。

「[恭子]の二重瞼の片ほうは、何かの加減で三重になった。それを見ると良人は怖いと思う。妻が何を考えているのでもないことが、そういう瞬間にはつきりするからである」（155）

これは明らかに論理的には誤った推論だが、三島はこの種の連想を好む。表層と深層の間、すなわち目に見えるものと隠された真実との間に、たいした懸隔などないことが示されるとき、それは心理の深淵さの否定となる。これは、三島作品の単なる気取りではなく、

三島作品を、身体的特徴で心理タイプを定位しようとした性と心理の医学モデルへとリンクさせることにつながる。この医学モデルには、骨相学者や 19 世紀後半の性科学者が身体的特徴によって類型化した同性愛の類型学も含まれるが、これは精神分析学が否定したモデルであった。三島は表面的な現象を重視することによって、俊輔が毛嫌いしていた、内面を重んじて表面の重要性を格下げする「近代心理学」の動向に対抗しているのだ。

同様に、人間の動機に関する三島の見解には、概してフロイト批判をとらえることができる。三島文学の独自性の一つに、登場人物が行動する際の（ときには馬鹿馬鹿しいほどの）行き過ぎた決意がある。そして、ごくささいな動作や言葉の調子が、他の登場人物に対して非常に特別な、ときには複雑な影響を及ぼすように意図されている。こうした影響関係や、登場人物自身の言葉や行為の効用に頼ることによって、三島作品の登場人物たちは、かなり危うい策略をはりめぐらす。その代表例が、悠一をつかって女性たちを操ろうとする俊輔のさまざまな策略である。このようにして三島の物語の筋立ては、非常にこみ入った相互作用の鎖を構築しているのだ。ときには、こうした相互作用が、人間的行為すなわち我々の体験に対する直接的な異義申し立てとなっているのだが、その場合、意図しない作用と偶然が、より重要な役割を果たしている。とはいえ、とりわけポスト・フロイトの我々の理解では、そうした相互作用は、いかなる抑制もうけぬ意志行為を三島が我々に明示しているというよりもむしろ、自我と無意識の衝動の弁証法に基づいているのだといえる。三島による、ときに信じがたい動機づけの方法は、俊輔という登場人物にもみられたように、精神分析モデルの否定、そして、無制限の自我という作家の特権性、をあらわすものとして捉えることができる。

こうしたことの小さな例が、恭子が恋人の並木とともに悠一を横浜に連れていく挿話で起こる。そこでは、言い間違い（parapraxes）、あるいは、しくじり（slips）というフロイトが非常に重要視していたことの一例とみなされるような出来事に対する、再解釈がほどこされている。恭子は並木に対して、悠一を「従弟の啓ちゃん」と紹介するが、そのあと、誤って悠一を「悠ちゃん」と呼んでしまい、それを並木に勘づかれる。この部分では次のように語られる。

「悠ちゃんおそれ入りますがそれを、と言った時の失言の調子には、すでに意識的な緊張があり、それが故意の失言であることを物語っていた」（275）。

この例は典型的である。というのは、三島作品の登場人物たちは、フロイト的なしくじりをしないからだ。むしろ、彼らは入念に仕組まれたシグナルを発しているのだ。

フロイトに対する愛憎入り交じった感情は、『禁色』でナルシズムの概念が援用されたことにも読み取ることができる。カフェ・ルドンの男性同性愛の世界が紹介される場面では、先天的と自己愛的という同性愛の二種類のタイプが語られている。自己愛的なタイプについては、このように語られる。

「彼は讚美の対象となったおのれ的美を敷衍して、男性一般の美学上の理想を樹て、一人前の男色家となるにいたるのである」（121）

これは、フロイトの同性愛の対象選択における自己愛的起源に関する報告（Freud v.7: 145n）が美化されたものであり、それはまた前述の「人間探究」の助言欄でも高橋が述べていたことである。悠一は、ゲイ・カルチャーに初めて触れたのち、自分の容姿を次第に気にするようになり、自分の美しさを確信するにいったとある。大磯のゲイ・パーティーまでには悠一のナルシズムは自明なものとなっており、結果、悠一はパーティーで、自分と似ているという理由で、ある少年に惹かれるのである（12、13 章の主題）。この挿話は、ナルシストが自分によく似た人間に性的魅力を感じるという、高橋が助言欄で論じていた、作られたものとしての同性愛のメカニズムと全く同じである。のちに鏑木伯爵が同じパーティーで悠一を誘惑する場面では、伯爵の熟達した誘惑の様子が、悠一の姿見へと伯爵が変身してゆくように描かれる。そして、「精神は精神の上にまどろみ、何の官能の力を借りずに、悠一の精神は半ば既にそれと重複しつつあるもう一人の悠一の精神と交合した。悠一の顔は悠一の顔に触れ、美しい眉は美しい眉に触れた。その夢みがちに半ばひらいた青年の唇は、彼が思いえがいた彼自身の美しい唇にふさがれた」（225-6）。

しかしながら、物語はフロイトの見解に抗して、ナルシズムを、単なる同性愛だけではなく異性愛にも通じるものとして表象する。俊輔の指示によって悠一が慈善舞踏会のダンスではじめて鏑木夫人に近づいた場面において、悠一の当初の心情は、夫人を誘惑するという（俊輔が設定した）試験に成功した喜びに充ちていた。彼の喜びはとても大きく、「その日彼はほとんど鏑木夫人を愛しているのではないかと疑ったほどである」（104）とある。ここには矛盾があるようだが、明らかに悠一は自分自身に対する関心を鏑木夫人

への愛と見誤っている。言いかえれば、異性愛者としての振る舞いへの自己満足が非常に大きかったために、悠一はそうした自分自身のイメージを愛したのだ。だが悠一はこれを、自分の振る舞いの実際の鑑賞者、すなわち鑄木夫人への愛だと解釈する。のちに鑄木夫人は、夫と悠一の肉体関係を知ったあと、悠一に上品な手紙を送るが、それによって悠一は夫人をこそ愛しているという考えに導かれる。だが、それを俊輔に嘲笑されることで、悠一は自分が完全に誤っていたことをまさに次の引用部のように認識し、己の考えを捨てるのだ。悠一は内心こう思う。

「やっぱり僕が鑄木夫人を愛しているなんてことはありえない。そうだ。僕はむしろ、夫人によってそれほど愛されている第二の僕、この世にありえないほど美しい一人の青年に恋心を抱いたのかもしれないんだ」 (319)

このように、フロイトのナルシシズムの概念は悠一のセクシュアリティ理解に重要である一方で、三島はその概念を、登場人物に安易に投影しているのではなく、意識的に援用しているのだ。

以上を要約すれば、ここまで私は、精神分析と三島作品の関係について、二つの視点を提示してきた。第一に、『愛の渇き』をとりあげ、性欲望および人間の行動に関するフロイトの見解を三島が十分に意識していたこと、また、本作品では物語構築のために精神分析の理論が援用されていることを示そうと試みた。第二に、『禁色』をとりあげ、三島が性欲望とくに男性同性愛の描出において、精神分析学の概念を利用し、かつ、それに挑戦してもいたことを論じた。

我々が三島作品に、当時日本で最も流通していたセクシュアリティ概念の形跡を見いだすことは必然である。このことを概説することによって、私は、『禁色』から読み取れるものが、フロイトを参照すること

から浮き彫りになるような隠された〈型〉ではなく、むしろテキスト生産というコンテキストにおける、フロイト概念の普及の直接的な影響の様相を示そうとしてきたのである。

ここまで論じてきたなかで最も興味深いのは、前述のように、フロイトの見解に惹きつけられていると同時に抵抗している様相、すなわち、フロイトの見解に対するアンビヴァレンスである。このことは、作家心理の真実をあばくためのツールとして三島作品を用いることが欺瞞であることを示唆する。我々が、精神分析医のソファーに〈三島という精神分析患者〉を据え、三島の想像の産物を解釈しようとしたところで、結局は〈三島という精神分析医〉がすでに我々のために症候記録を書いていたことに気づくにすぎないのである。

#### 【参考文献】

- Freud, Sigmund. 2001 (vol 2). *Studies on Hysteria. (The Complete Psychological Works of Sigmund Freud, volume II)*. London: Vintage  
 -. 2001 (vol 7). *A Case of Hysteria, Three Essays on Sexuality and Other Works. (The Complete Psychological Works of Sigmund Freud, volume VII)*. London: Vintage.
- Keen, Donald. 1984. *Dawn to the West: Japanese Literature of the Modern Era-Fiction*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 松本徹. 2005 『三島由紀夫エロスの劇』 作品社
- Mishima Yukio. 1971. *Forbidden Colours (禁色)*. Trans. Alfred H. Marks. London: Penguin  
 -. 『決定版三島由紀夫全集』(全42巻)集英社, 2000-2003
- Piven, Jerry S. 2004. *The Madness and Perversion of Yukio Mishima*. Westport, Connecticut: Praeger.
- 高橋鐵. 1947. 「相談と回答—『異常性愛』者の分析」. 「人間探究」8月号: pp. 46-51  
 -. 1951. 「天国か地獄か—男子同性愛者の集い」. 「人間探究」1月号: pp. 70-83.

(翻訳：武内 佳代／お茶の水女子大学大学院  
 人間文化研究科 国際日本学専攻)

ADAMS, Duncan / ロンドン大学 アジア・アフリカ研究院 (SOAS)